

● 報恩講とは

「報恩講」という名称は、親鸞聖人のひ孫である本願寺第3代覚如上人が、聖人の33回忌にあわせて『報恩講私記』を著されたことに由来しています。

先年ご往生された梯實圓勤學はご法話の中で、「ご開山（親鸞聖人）さま、ありがとうございます。あなたのおかげで私もあなたと同じお念仏いただいて、同じ信心をいただいて、同じお浄土で今度は出遇わせていただきます、とお礼を申しあげる法要が報恩講だよ」とおっしゃられています（『伝道』2015 No84・星野親行師の寄稿より）。

一般寺院や本山、別院など全国の浄土真宗のお寺でお勤めされる報恩講に皆さまも是非ともお参りし、親鸞さまにお礼申し上げましょう。

● 寺院の「報恩講」

全国の各寺院では一年に一度お勤めされます。本山の報恩講と同じ期日にお勤めする寺院では「御正忌」、本山の報恩講に先立ち9月から1月頃にかけてお勤めする寺院では、「お引き上げ」や「お取り越し」と呼ぶことが多いようです。また、地域によっては、「ほんこさん」と呼んで親しまれています。

● 本山本願寺、別院などの「報恩講」

本山本願寺においては、親鸞聖人の祥月命日にお勤めすることから「御正忌報恩講」といい、毎年1月9日から16日までお勤めします。

また、東京の築地本願寺のほか、各地におけるお念仏の中心道場として別院、教堂が全国にあります。多くは、本山の御正忌報恩講に先立ち、9月から1月上旬頃にかけて「報恩講」をお勤めします。



● 親鸞聖人のご生涯

1173年5月21日（承安3年4月1日）、京都・日野の里で誕生。9歳で得度（仏門に入り僧となること）。比叡山で20年間修行されたが、迷いや苦悩から逃れることができなかったため、山を下り、六角堂での救世観音の夢告により法然聖人の門弟となられる。35歳の時、専修念仏停止によって越後に流罪となり、39歳で赦免の後、妻・恵信さまや家族とともに関東へ移り、約20年間布教を行われた。1224年（元仁元年）に主著『顕浄土真実教行証文類（教行信証）』を著された。その後、京都に帰り著述活動を行われ、1263年1月16日（弘長2年11月28日）、90歳でご往生。

★ 報恩講の案内

の報恩講は

月	日	から
月	日	です。

皆さまそろってお参りください。

報恩講を ご縁に 2



©2008 HONGWANJI

浄土真宗本願寺派
(西本願寺)

ほうおんこう 家庭での「報恩講」をお勤めいたしましょう!

ほうおんこう あみだにょらい ほんがん
「報恩講」は、阿弥陀如来の本願のおこ
ろを明らかにしてくださった宗祖親鸞聖人
のご遺徳を偲び、そのご恩に感謝の思いか
らお勤めされる、もっとも大切な法要です。

「報恩講」は、お寺でお勤めされるだけで
はなく、古くから広くご門徒の家庭でもお勤
めされてきました。地方によっては、「親の法
事はもちろん大切だけど、報恩講はさらに
大切」とまでいわれるほどです。親の法事の
他に、さらに「報恩講」が大切とは、どうい
うことなのでしょう?その答えは、親鸞聖人
の教えの中にあります。

たん に しょう つい
『歎異抄』は、親鸞聖人が「亡き父母の追
善供養のために念仏したことは、かつて一度

もありません」とおっしゃったと伝えています。そ
う聞くと、「親鸞聖人は親不孝だったの?」と思わ
れる方がおられるかも知れませんが、そうではあ
りません。『歎異抄』には、続けて「というのは、命
のあるものはすべてみな、これまで何度となく生
まれ変わり死に変わりしてきた中で、父母であり
兄弟・姉妹であったのです。この世の命を終え、浄
土に往生してただちに仏となり、どの人をもみな
救わなければならないのです」と記されています。

確かにお父さん、お母さんこそが、直接に私に
命をくださった方かも知れませんが、命の連続の
中で考えるなら、すべての命はつながっているの
です。私たちは、自然の恵みのもとで多くの命と
つながり合い、はぐくまれています。そして、多
くの方々の支えと仏さまのご縁に、いかされて生
きているのです。

このように、多くの命のつながりと、私の命の
落ち着き先である浄土への道を示し、今の私を
支えてくださる「畢竟依」(究極の依りどころ)を
示してくださったのが親鸞聖人でした。ですから、



私たちは、阿弥陀如来のおこころを聞かせ
ていただくとともに、親鸞聖人のお導きへの
感謝の思いから「報恩講」を大切にお勤めし
てきたのです。

たくさんのご家族と一緒に住まいの方、
実家から離れ別の土地で世帯を持たれてい
る方、マンションなどで一人暮らしをなさ
っている方、現代はさまざまな生活の形があ
りますが、念仏者として一番大切な「報恩講」
をお勤めいたしましょう!

